影なる王女

第六章

月が、さざ波の立つ暗い水面に揺れていた。

やがて波は大きくうねり、をあげて月影を蹴散らした。

住吉(すみよし)の大伴金村(おおとものかなむら)の邸の裏にある池を、静かに漕ぎ寄せる船が十艘、それぞれに十の武装した兵が乗っていた。

池の畔(ほとり)に建つ稚建皇子(わかたけるのみこ)の宮には、常ならば弓を携えた十数人の兵が守っているはずだった。

「兵の姿が見えぬ」

先頭の舟に、葛城韓媛(かつらぎのからひめ)が立っていた。

「手はずどおりだ」

大伴の邸内にある内通者が、兵たちに痺(しび)れ薬の入った酒を振る舞い、眠らせているはずだった。ふだんは盛大に焚かれている篝火も、今夜は少ない。

葛城韓媛は、葛城の兵百を率い、裏手から攻め入り、稚建皇子の宮を襲う役目だった。宮に押し入り、影皇女(かげのひめみこ)を殺し、稚建皇子をさらう。

「彼等が抗うならば」

息長皇后(おきながのおおきさき)は、こう言った。

「殺せ」
何故に日継の皇子なる稚建皇子と、その妹なる影皇女を殺さねばならぬのか。息長皇后はながながと説明したが、葛城韓媛は聞いていなかった。戦を好む韓媛は、また兵を率いて敵を攻める機会を得られたことに、胸を踊らせていた。敵が誰であるか、何故に敵であるのか、それは韓媛の関心の外であった。彼女は、ひたすら今宵の敵が、彼女に抗しうる強兵であることを望むばかりであった。
「影皇女は、素手で十数の兵を倒したという」
韓媛は、傍らの兵に囁いた。
「汝等にはかなうまい。影皇女は吾が討つ。手出しはするべからず」
大伴の邸の表門には、平群鮪が、やはり百の兵を率いて押し寄せているはずであった。鮪は表門より邸に押し入り、金村を討つ役目が与えられていた。形の上では、鮪が大将軍の立場にあったが、韓媛はむしろ、影皇女と相対する役を与えられたことを誇りに思った。剣の心得も危うい老豪族を討ったところで、何の誉れになろう。
舟が岸に着いた。韓媛は真っ先に舟を飛び降り、池の水に沓を濡らし、剣を抜いて高く天にかざした。兵どもは次々と舟を飛び降りた。
韓媛は剣を振り下ろし、ゆっくりと宮に向かって歩き始めた。兵どもも、韓媛の歩みに合わせ、矛を構えて従った。
「待て」

韓媛は足を止めた。兵たちも止めた。
「この匂いは……」
韓媛は四囲を見回した。あちらこちらに、丸めた筵が転がっていた。
「油……？」
匂いは、その筵から漂ってくる。
びゅん、と唸りを上げ、空を切り裂いて炎が飛んできた。炎は転がった筵に突き刺さり、大きく燃え上がった。
屋根だ……。
韓媛は、宮から少し離れて建つ大伴の邸を見上げた。弓に火矢をつがえ、弦を引き絞る兵が十人余……。
一斉に火矢が放たれ、そこかしこに転がる筵を燃え上がらせた。油の染み込んだ筵は盛大に炎をあげ、葛城の兵たちの姿をくっきりと照らし出した。
「伏せよ！」
韓媛が叫ぶより早く、葛城の兵たちを降り注ぐ矢の雨が襲った。兵たちは次々と血煙をあげて倒れた。
待ち伏せされていた……。
葛城韓媛は、咄嗟に倒れた兵の屍の下に潜り込んで盾とした、さらに兵たちの悲鳴、地

に倒れ伏す音、闇夜を切り裂く矢の唸りが絶え間なく続いた。
そっと見上げると、屋根の上では、二十四人の兵が十二人ずつ二組に分かれ、間断なく矢を射かけていた。矢を射終えた十二人が後方に下がり矢をつがえている間、別の十二人が前に出て射る。こうして百の兵は間断なく上から矢を浴びせられた。
金村め……。
韓媛は歯がみした。屋根の上にはうず高く矢の束が積まれていた。射かける二十四人の兵は、いずれも弓の上手と見えた。葛城の兵たちは恐惶し、ひたすら逃げまどい、抗う術なく射殺された。幾人かの兵が矢を射返したが、屋根までは届かない。
読まれていたのだ……。こちらの腹はすべて……。

表門から押し入った平群の兵どもも、同じ状況にあった。
「怯(ひる)むな！　身を隠し、敵の矢が尽きるのを待て！」
建物の陰に身を隠した平群鮪は、声を枯らして叫んでいた。すでに兵の多くは矢に射抜かれて地に転がるか、押し入った門から逃げ出していた。残るは幾人か。
ここは退くべきか……。
いったん浮かんだ考えを鮪は打ち消した。ここで退けば、平群の滅びは避けられない。やがて北から四百五十の大伴の軍が引き返してくる。征東の戦を生きのびた精兵の多くを失った以上、ここで金村の息の根を止める他、活路はない。

ふと、四囲が静寂に包まれた。屋根の上の大伴の兵長(いくさのおさ)が、なにやら階下に向かって叫んでいる。兵たちの隊列が乱れていた。さては、矢が尽きたか……。
「平群の兵(いくさびと)どもよ！」
鮪は物陰を飛び出し、剣を抜いた。
「駆けよ！」
おう、と呼応した兵の数は、五十には満たないが、四十は越えている。戦える。
「駈けよ！」
兵たちは矛を構え、おめき声をあげて大伴の邸に向かって駈けた。鮪は、兵の群の半ばにあって剣を振り回し、声を張り上げて勇を鼓舞した。
突然、兵どもの足が止まった。真っ先に駈けていた兵どもが三名、血飛沫をあげて転がった。
「如何した」
またも悲鳴があがった。さらに三人の兵が倒れた。
鮪は呆然と、前方に現れた敵を凝視した。
女だった。

身の丈は六尺はあるだろうか。
逞しく長い手脚は剥き出しに、胴にまとった朱塗りの甲冑が、豊かな乳房を押し上げて

いた。額に鉄片を埋め込んだ朱色の布を巻き、縮れた長い髪が燃えるように広がっている。
左右の手には、兵どもの血を滴らせた剣が提げられていた。
これが……影皇女……。
鮪は息を呑んだ。
素手で十数の兵を倒したという、あの影皇女……。
数人の兵が口々に喚いて飛びかかり、あっという間に屍となって転がった。
後は、ひたすらな虐殺だった。影皇女は悲鳴をあげて逃げまどう兵どもを追いかけては斬り、手で首をへし折り、脚で踏み砕いた。
気が付けば、平群鮪は、手勢を事ごとく失い、地面を埋め尽くす屍の血の海になす術なく立ちつくしていた。
影皇女は、息ひとつ乱さず、じっと鮪を見つめていた。
すでに鮪の戦意は失われていた。脳は働きを止め、四肢は凍って動かなかった。
美しい……。
鮪は、返り血を浴びて真っ赤に染まった皇女の貌を見つめた。整った貌だちに、どこか女童のような澄んだ瞳。
誰かに似ている……。そう、葛城韓媛。東国の蝦夷と戦うとき、韓媛はやはりあのような、澄んだ眼をしていた……。
影皇女は、双の手に提げた剣を地に突き立て、ゆっくりと、歩み寄ってきた。

吾は……。
鮪は、彼の視界のなかで次第に大きくなってゆく女を凝視した。
剣で闘うに値いしないと、汝は見るのか……。
次の瞬間、平群鮪は、股間に衝撃を覚えた。凄まじい激痛がこみ上げ、脚が崩れた。
鮪は、だらしなく股間を両手で覆い、膝を地に突いて呻いた。
あの時と同じだ……。韓媛に股間を蹴られた時と……。
鮪は、涙に溢れた眼で見上げた。皇女が鮪を見下ろしていた。その澄んだ瞳には、嘲りも哀れみも、憎しみも悦びも、何の感情も浮かんではいない。
否……。韓媛に蹴られた時とは比べるべくもない……。
鮪の下半身は、石のように固まり、灼熱の炎で炙られるようだった。苦いものがこみ上げ、口腔を満たした。血の匂いがした。腹部は間歇泉のように脈打ち、熱い物が陽物の先端から迸っていた。股間が真っ赤に染まっていた。
潰れたのか……。ふぐり玉を潰され、陰嚢に溢れた血が、出口を求めて渦巻いているのだ……。
ただ一撃で……。
もはや、鮪の兵としての誇りは、ふぐり玉とともに微塵に砕かれた。眼でぼやけた視界が次第に暗くなっていった。
死ぬのか……。このまま惨めに死ぬのか……。

二つの手が、鮪の首を覆った。
柔らかい……。柔らかい女の手……。
手に力が込められ、鮪は永久に意識を失った。彼の頸骨は、二つにへし折られていた。

「鮪！」
影皇女の背後で、悲鳴がほとばしった。
葛城韓媛だった。
振り向いた影皇女には眼もくれず、倒れた鮪に向かって駆け、屍を抱きおこした。鮪の頭（こうべ）が後ろに傾き、後頭部が背に着いた。
「嗚呼（ああ）……」
韓媛は身を震わせ、折られた首を抱え、鮪の頭を胸に押し付けた。
影皇女は、微動だにせず、韓媛を見下ろしている。
「汝が……」
影皇女の眼差しに気づいて、韓媛はすぐさま身を起こし、剣を構えた。
「影皇女か……？」
影皇女は首を傾げたまま黙（もだ）していた。
「鮪……」
韓媛は足下に横たわる鮪を見やり、唇を歪めた。白眼を剥き、口から血反吐を垂らし、袴（ズボン）

は鮮血に染まり、惨めな最期を物語っていた。
韓媛の眼から涙がこぼれ落ちた。
影皇女は、不思議そうな面もちで、韓媛の涙を見つめ、口を開いた。
「あ……に……？」
韓媛と鮪の屍を交互に見比べ、重ねて問うた。
「あ……に……？」
「兄ではない」
韓媛は、影皇女の意を悟った。
「吾が夫（せ）である」
「せ……？」
影皇女は、分からないというふうに瞬きした。
「然り。吾が夫。いと愛（ほ）しき夫。汝は、吾が夫を殺した」
韓媛は肩を振るわせ、溢れる涙を拭おうともしなかった。
「吾は汝を討つ」
刃が篝火を受けて一閃した。危うくかわした影皇女の肩に、韓媛は素早く身を返して剣を打ち込んだ。皇女は後ずさった。
「剣をとれ」
韓媛は叫んだ。影皇女は困惑した面もちで、何かを言うと唇を動かした。

「吾は汝を討つ。剣をとれ！」
重ねて叫ぶ韓媛に、皇女は首を振るしかなかった。
「何故に戦わぬ！」
言葉は口より出でず、韓媛の怒号に、皇女は悲しげな眼差しを返し、鮪の屍を指さした。
「汝は……」
怒りの迸(ほとばし)りが、その眼差しに堰(せ)き止められ、韓媛は呻(うめ)いた。
「吾を憐(あわ)れむか……」
言うなり、韓媛は突進した。剣を地面に水平に構え、まっすぐに皇女めがけて突き出した。皇女は身をよじってかわした。かわされることは、韓媛には折り込み済みだった。咄嗟(とっさ)に彼女は、皇女の足を払った。
後ろから膝を払われ、皇女はよろめいた。韓媛は、皇女の延髄を狙って剣を打ち込んだ。皇女は身を屈(かが)めてかわした。その腰を韓媛は蹴った。皇女は地に両手を突いた。韓媛は、皇女の乳房を蹴り上げた。
皇女は両手で胸を抱えてうずくまった。韓媛は剣を振り上げ、皇女の首筋に振り下ろした。振り下ろそうとして、手首を掴まれた。
動けない……。
凄まじい力だった。影皇女は、地に座ったまま半身をねじって背後の韓媛に貌を向け、相手の手首をつかんだ右手に力をこめた。韓媛は、剣を振り下ろそうとする姿勢のまま、

動けなくなった。掴まれた手首が、今にも砕けそうだった。
皇女は、韓媛の手首を掴んだままゆっくりと立ち上がった。韓媛は、あまりの苦痛に、剣を落とした。皇女は、韓媛を突き飛ばした。韓媛の躯(からだ)は宙に浮き、どさりと地に投げ出された。
勝てない……。
韓媛の心に、今まで感じたことのなかった恐怖が生まれた。
この相手には勝てない……。
勝てない相手など、韓媛にはいなかった。いなかっただけに、韓媛は初めて覚えた感情に、なす術(すべ)を知らなかった。
うなりをあげて矢が飛来し、韓媛の頬をかすめて地に突き立った。見上げれば、屋根の上に弓を引き絞る兵が数名、韓媛にねらいを定めていた。
韓媛は絶叫した。
躯が跳躍した。鷲掴みにされた心臓が、今にも肉を破って引きちぎられそうな恐怖に包まれ、韓媛は逃げた。逃げるそばから、矢雨が降り注いだ。韓媛はひたすらに逃げた。
これほどまでに……。
夜が明け始めていた。
大伴金村は、邸内の広庭に並べられた葛城や平群の兵どもの屍を見やりながら、勝利の

喜びよりも、えも言えぬ不安に苛まれる己を感じていた。
矢を浴びて死んだ兵が五十。影皇女が殺した兵は七十……。
二百の敵を、五十の兵で追い払った。払暁には、大伴羽生(おおとものはぶ)が四百五十の兵を引きつれて戻ってくるはず……。
息長皇后(おきながのおおきさき)は、大伴の邸に仕える下部(しもべ)に財宝を与え、こちらの様子を探ろうとした。皇后がそうするであろうことは、すでに見破っていた。彼らは皇后から宝物を受け取りつつ、金村の命に従って偽りの報せを皇后に伝えた。皇后は、金村の謀(はかりごと)のままに動いた。
四百五十の征北軍は、言うまでもなく吉備には至らず、難波に近い地に潜んでいた。平群鮪と葛城韓媛が二百の兵を率いて出陣するや否や、下部を走らせて征北軍を呼び戻した。日が昇るころには住吉に戻ってくるはず。
後は、四百五十の兵を使って平群や葛城を滅ぼし、王宮を囲む。息長皇后をどうするか、それはヤマトの豪族どもの動静を見て決めればいい。
金村は勝った。息長皇后に勝った。勝ってなお、金村は不安であった。
何が金村を不安にさせるのか。
似ている……。
吾田媛(あだひめ)に……。
勝利に沸き立つ兵の群から独り離れて、影皇女は地に尻を敷き、膝を両手で抱えている。右手に一輪の花が握られていた。皇女は、花を揺らしながら、半ば瞼(まぶた)を閉じ、あらぬ虚

空を見つめている。
大王家の血筋を引く皇女。
一人で数十の敵を打ち倒す大力。
そういう皇女を、どう扱えばいい……。
今のところ、影皇女は、金村の意に添って動いている。だが、それは彼女を幽閉の身から救い出した稚建皇子をいと愛しく思えばこそ。影皇女が、自分の意のままに動こうとしはじめたとき、それを止める術はあるのか……。
やがて皇女は、膝に貌を埋め、女童のように眠りに落ちた。
丸めたその大きな背中を見やりつつ、金村は、吾田媛を執念深く死地に追いやろうとした先の大王の不安が、理解できたように思った。

夜明けと同時に、難波の宮処を、軍馬の轟きや、駈ける兵どもの沓音や、そこかしこの門を破る槌の音が満たした。
突如現れた四百五十の兵どもは三手に分かれ、一手は平群の邸へ、一手は葛城の邸へ、主力は難波の王宮を囲んだ。
民人(たみびと)や、政事(まつりごと)に関わることを許されぬ小豪族どもは、首をすくめ、嵐の吹きすぎるのをひたすら待った。
やがて、平群や葛城の邸から、黒煙が湧き起こり、燃えさかる炎が天を焦がした。小豪

族はそれを合図に大伴の邸に馳せ参じた。いまや千を数える兵たちは、大伴金村の命ずるままに、宮処(みやこ)のあちこちを駈け、炎上した邸から囲みを破って逃れ出た平群や葛城の残党を狩り立てた。

王宮は、三百を越える兵に囲まれ、勢子(せこ)に追いつめられた手負いの鹿のように静まりかえっていた。

すでに日は傾き、殺戮の一日は終わろうとしていた。平群と葛城の一族のほとんどは殺され、あるいは捕らえられた。

残るは、王宮に籠もる息長皇后のみ。

「如何する……」

凝然と王宮の門を見つめる金村を、傍らの羽生が促した。夜になれば、闇夜に紛れて獲物を取り逃しかねない。

「羽生よ」

金村はゆっくりと貌を向け、血気に逸(はや)る弟をなだめた。

「皇女の目覚めを待て」

影皇女は、昨夜の戦の疲れからか、住吉の宮で眠り込んだままだった。

「しかし……」

羽生は不満げな面もちを隠さなかった。一人で七十人を倒した皇女の恐るべき力は、羽

生も聞き及んでいた。だが、こちらは三百。王宮に籠もる敵兵は多くとも五十。兵の鍛錬に心を砕いてきた羽生としては、十六歳の乙女に頼ろうとする兄の指図は、屈辱でもあった。

「詰めを誤ってはならぬ」

金村は弟の肩を叩いた。

「皇女は長年、吾等が邸内の暗い苫屋に押し込められ、皇后とあの宮女どもに虐げられてきた。皇女の手で、皇后を討たせてやりたい。それに……」

金村はかすかに微笑んだ。

「皇女が手を下せば、仮にも日輪の女神の裔(すえ)なる大王家の皇后を、臣たる吾等が誅したことにはなるまい」

あくまでも皇后は、大王家に背いた逆賊として葬らねばならない。

羽生は息を呑んだ。金村はついに皇后の誅殺を決意したことを、彼は知った。羽生が兵どもを指揮して宮処のあちこちで殺戮を行っている間、金村は、今日になって大伴の与力に馳せ参じた豪族どもに会い、彼等が口々に皇后の悪行を言い募るのに耳を傾けた。皇后の誅殺は、ヤマトの豪族の総意となった。

「稚建皇子(わかたけるのみこ)は、そのことを……」

こわごわと問う羽生に、金村は曖昧に微笑んだ。

皇子の意を問わぬまま事を進める以上、影皇女に皇后を殺させるのは、最前の策であっ

た。影皇女は、日輪の女神の末裔なのだ。日輪の女神の末裔が、臣下の家より出でた皇后を誅する。ヤマトの建前は守られる。
羽生はうなずくしかなかった。
だが、金村の本意は別にあった。羽生には知らせず、従弟の真嚙にこう命じていた。
機を伺い、背後より矢を射かけ、皇女を殺せ、と。
あくまでも影皇女は、乱戦のなかで敵兵に殺された形を装え、と。
さらに、息長皇后は、影皇女に撲殺されたように装え、と。
「影皇女である！」
馬蹄が轟き、振り向けばその大伴真嚙と影皇女が、駒を並べて駆けてきた。その後ろに真嚙の手兵が十人、弓矢を携え、徒で走り従っている。
「やっと目覚めたか」
金村は羽生に向かって合図した。羽生は剣を抜き、叫んだ。
「攻めよ！」
矛を構えた三百の兵は、犬狼のように王宮の門に群がった。

静かだ……。
同じ頃、大伴の邸内の春日郎女の寝屋では、稚建皇子が眠りより覚め、半身を起こしていた。すでに、陰嚢の裡を苛んでいた痛みは和らぎ、身を起こして食事をとるまでには

恢復していた。
皇子の傍らに、春日郎女がうつぶせに臥していた。寝息をたて、閉じた眼の下に隈が浮かび、ふっくらと豊かだった頬がやや痩けていた。
あの歌垣の夜以来、郎女は皇子の傍らにつききり、口移しで水や粥や薬湯を呑ませ、時折うなされて身悶えする皇子を抱きあやした。
皇子が恢復して後も、郎女は寝屋を出ようとはしなかった。思い出したように床に額をつけて涙を零しながら詫びの言葉を連ね、それから皇子の股間をはだけ、陽物を口に含んだ。
郎女の口に含まれ、舌や指で愛撫され、しかし皇子の陽物はかすかにも動かなかった。郎女はものに憑かれたように、あらゆる手管を用いて、己が手で傷つけた男としての機能を、元に復せしめようとした。
汗にまみれ、髪を乱して股間に貌を埋める郎女を、皇子は悲しげな眼差しで見おろすしかなかった。
「郎女」
ある夜、皇子は言った。
「左のふぐり玉が残っている」
痛めつけよ、と促したが、郎女は唇を結んだまま激しく首を振って拒んだ。

喉に乾きを覚え、皇子は郎女に水を運ばせるよう命じかけ、口を噤(つぐ)んだ。疲れ切った郎女は、半ば口を開け、女童(めのわらべ)のように安らいだ面もちで寝入っている。
皇子は音をたてぬよう立ち上がり、寝屋を出た。
それにしても静かな……。
昨夜、兵どもの喚きや、宙を引き裂く矢の唸(うな)り、剣の打ち合う音で、邸内は喧噪(けんそう)に包まれていた、郎女の寝屋には三人の兵が守り、郎女も自ら短刀を懐に抱き、身じろぎもせず皇子に寄り添って動かなかった。
戦は終わったのか……。
大伴金村からは、葛城や平群が皇子に背いた、とのみ告げられていた。彼等を誅すれば、ヤマトは穏やかに治まる。金村はそう言っていた。真に受ける皇子ではなかったが、疑念を差し挟む気もなかった。
妹なる影皇女と、妻なる春日郎女と、宮の内で安穏(あんのん)な日々を送る。皇子の望みはそれだけであった。
「皇子」
通りかかった下部が、額をつけて拝礼した。
「水を……」
皇子は命じ、立ち去ろうとする下部を、ふと呼び止めた。
「戦はすでに果てたか」

「平群と葛城は滅びた」
下部は膝を突いて応えた。
「残るは難波の王宮。吾等が兵が攻めている」
「王宮……？」
「息長皇后は、平群や葛城と語らい、皇子を害せんとした。皇后を誅すれば、戦は終わる」
そのとき、稚建皇子の下腹部に、暖かな火が点(とも)り、やがて炎となって渦巻いてゆくのを感じた。
皇后を誅する……。
やわらかな陽物が熱い血潮で満たされ、硬くそそり立ちはじめた。
皇后が誅されてしまえば……。
ここ半年、忘れていた欲望が鎌首をもたげ、皇子の脳裏を覆い尽くした。
難波の王宮は阿鼻叫喚(あびきょうかん)に包まれていた。
猛(たけ)り狂う大伴の兵どもは、敵兵であれ、下部であれ、宮女であれ、動く者悉(ことごと)くに襲いかかり、寄ってたかって剣を振り下ろし、矛を突き立てた。厳(おごそ)かに朝議を行う広庭(ひろにわ)は、無惨な切り刻まれた屍の血に染まった。
頑強に抗う王宮の兵も、数を恃(たの)んだ大伴の兵に次第に押し返され、ついに広庭は制圧さ

れた。大伴の兵どもは、廟堂の階を駆け上がり、扉を開けた。
「逆賊ども！」
真っ先かけて廟堂に飛び込んだ兵が二人、血煙をあげて階を転がり落ち、二人が股間を蹴り上げられ、呻きをあげて倒れた。
「神の居ます聖なる王宮を血で汚す悪逆の兵どもよ。黄泉路へ逝け！」
宮女の葉津女と香和女であった。甲冑に身を固め、髪をきつく結び、剣を一閃させた。
さらに二人の兵が倒れた。
大伴の兵どもは、勢いを失って足を止め、後ずさった。
「射よ！」
宮女たちは背後に控える十人の兵に命じた。十人の兵は弓を引き絞って進み出、おじけついた大伴の兵どもに矢雨を浴びせた。
大伴の兵どもは背を向けて逃げ、数人が倒れた。
「扉を閉じよ！」
再び廟堂の扉が閉ざされた。

廟堂の奥深く、息長皇后は、宮女の八須女と三人の兵に守られ、蒼白の面もちで身を固くしていた。
吾は負けぬ……。

たとえ負けても、吾は死なぬ……。
皇后は口のなかで、同じ言葉を繰り返した。
必ず、吾は生きる……。
命あらば、必ずいつか勝てる……。

いったん閉じた廟堂の扉が、重い音を立てて震えた。横に渡した閂が、半ば裂けた。
「丸太で、扉を破ろうとしている……」
香和女は呟いて葉津女と頷きあい、兵どもに合図した。兵は弓に矢をつがえ、引き絞って敵の侵入を待った。
再び轟音が響き、閂は真二つに折れ、扉が押し開けられた。王宮の兵どもは一斉に矢を放った。飛び込んできた大伴の兵の群れがばたばたと倒れた。その背後から、黒い影が跳躍した。
王宮の兵どもは、二の矢をつがえる暇も、腰の剣を抜く暇も与えられず、血飛沫をあげて次々と床に転がった。
「影皇女……」
葉津女が呻き、二人の宮女は眼を見開いた。
影皇女は、返り血を拭いもせず、左右の手に提げた剣の切っ先を、ゆっくりと宮女たちに向けた。

その瞳に、憎悪の炎が燃えさかっていた。宮女たちは剣を構え、わずかに後ずさった。宮女たちの瞳がかすかに揺れていた。皇女の眼から、憎しみの色が消え、嘲りが浮かんだ。

皇女は左右の剣を床に突き立て、ゆっくりと宮女たちに歩み寄った。

「汝等は裏へ回れ！」

影皇女の背後で指揮していた大伴真噛（おおともの まぐい）が叫んだ。不審げな面もちの兵長どもに、真噛は重ねて命じた。

「ここは、皇女を先に立てる。独りで七十を倒した皇女。吾等の加勢は要るまい」

無駄に兵を失うことはない……。面もちにその意を込めた真噛に、兵長どもは頷き、兵に向かって合図した。真噛と、腹心の手兵十人のみが残った。

「化けもの！」

葉津女が剣を振りかざし、皇女めがけて突き進んだ。薙ぐように脇腹を襲った剣を、皇女は後ずさってかわし、素早く体勢を直して剣を突き出した葉津女の股間を、脚をあげて蹴った。

葉津女の躯（からだ）は宙に浮き、恥骨が砕ける音が響いた。床に投げ出された葉津女は、鮮血が迸る己が陰（ほと）を両手で押さえ、転げ回って悶絶した。

香和女が、皇女の背後から襲いかかった。皇女は振り向きざまに、人さし指と中指を立

て、香和女の両眼を突いた。

香和女は絶叫した。血の噴き出す左右の眼の孔（あな）を手で覆った。皇女は、香和女の股間を蹴った。香和女はくずおれ、左手で股間を、右手で貌を覆って狂ったように転げ悶えた。

葉津女はようやく立ち上がった。皇女はその右腕を掴み、背後にねじ上げてへし折った。葉津女は悲鳴をあげた。皇女は葉津女の髪の毛をつかみ、壁に貌を叩きつけた。葉津女は貌じゅうの孔から血を流し、うつぶせに倒れた。

死にきれずぬまま、凄まじい苦痛に悶え呻く二人の宮女を、影皇女はかわるがわる何度も蹴った。骨の砕ける音が廟堂じゅうに鳴り響いた。

「もうよい……」

真噛は、皇女に足蹴（あしげ）にされ、血まみれの無惨な肉塊へと化してゆく二人の宮女から眼を逸らし、控える手兵どもに合図を送った。

十人の兵どもは立ち上がり、弓を引き絞った。鏃（やじり）はまっすぐに、皇女に向けられた。

「待て！」

矢を放とうとした兵どもを、真噛が押しとどめた。

兵どもは、訝しげに振り返り、見開かれた真噛の眼差しの先を見、弾かれたように膝を突いて拝礼した。

稚建皇子が、甲冑はつけず、腰に剣を帯びた姿で廟堂の階をゆっくりと昇って現れた。

「あ……に……！」

影皇女は身を躍らせて走り寄り、皇子に抱きついた。

「真噛」

皇女の烈(はげ)しい抱擁を受け止めながら、稚建皇子は蒼い貌を、真噛に向けた。

「これより先は、吾と影皇女のみで行く」

真噛は、眼を見開いた。

「奥には未だ、残兵が……」

「吾には、影皇女がついている」

皇子は、影皇女のたくましい肩に手を回して撫でた。

「しかし……」

なおも止めようとする真噛に、皇子は屹(き)っと言い放った。

「汝等は廟堂に押し入り、息長皇后を如何するつもりか」

真噛は口を噤んだ。

「生きて捕らえるか？　誅殺するか？」

冷たく見据える皇子の眼差しに、真噛はうつむいた。

「先の大王の皇后を如何にするか、吾は金村より何も談合されていない。皇后の生死を定める権を有するは、日輪の女神の裔なる大王家の一族のみ！」

真噛の貌から血の気が引いた。皇子は静かに結んだ。

「故に、大王家の一族なる吾と影皇女で、皇后を如何するか、会うた上で決める」

六尺豊かな影皇女が、小柄で痩せた稚建皇子を守るようにして廟堂の奥に消え、扉は固く閉ざされた。

駆けつけた大伴金村は、真噛から皇子の言を聞き、総身が強張るのを感じた。

かの、ひよわな皇子が、日継の皇子たる己が意を押し通した……。

乱戦の最中に皇后もろとも影皇女を葬り去る策は阻(はば)まれた。ただ独りの日継の皇子の眼の前で、それをなすことは憚られた。金村の威光は、日継の皇子の妻の父なるが故のものなのだから。

「如何する……」

指示を求めて見上げる真噛に、金村は力無く応えるしかなかった。

「ここにて、皇子の戻るを待て」

まさか、己に刃を向けた息長皇后を、稚建皇子が赦すはずがない。皇子が赦しても、長年、皇后に責め苛まれ続けた影皇女が赦すはずがない、必ず、あの大力で皇后の四肢を引き裂き、息の根を止めるだろう……。

後は、改めて策をたてるしかない。

人けのなくがらんとした廟堂の広間を抜け、皇后の寝屋へと通じる薄暗い回廊を、稚建

皇子と影皇女は、寄り添いあって歩んだ。兵の姿もなく、下部や宮女も見えなかった。討たれるか、逃げるかしたのであろう。

嬉しげに頬を擦り寄せる皇女に、皇子は微笑みを返した。

「妹皇女よ」

皇子は囁いた。影皇女は大きな眼を潤ませ、兄の貌を見つめた。

「この先に息長皇后がいる」

その名を耳にして、皇女の微笑みが消えた。

「その傍らに宮女の八須女がいるはず。汝は八須女を生きたまま捕らえ、元来た道を戻り、金村に引き渡せ。殺してはならない」

訝しげに眉を顰める皇女に、皇子は言い聞かせた。

「彼等を生きたまま捕らえ、彼等が汝にしたように、狭い苫屋に閉じこめ、汝が受けたのと同じ苦しみを与えよう」

皇女は眉根を開き、かすかに笑みを浮かべてうなずいた。

回廊の突き当たりに、大きな樫の扉があった。

皇子は扉の前に立ち止まり、皇女に向かってうなずいた。

影皇女は、扉に手をかけ、押し広げた。

途端に中から、喚き声をあげて三人の兵が飛び出してきた。皇女は先頭の兵の股間を蹴

り上げた。肉塊の押し潰される音が響き、兵士は口と股間から血を噴いて倒れた。残る二人の兵は、左右の手で剣を抜きはなった皇女に、瞬く間に斬り伏せられた。

扉を開け放った先は、皇后の寝屋であった。灯火が焚かれ、天井から吊された茜色の薄衣の緞帳が垂れ下がっていた。皇女は、緞帳を引きちぎり、奥に進んだ。

「下がれ！」

甲高くかすれた叫びとともに、武装した宮女の八須女が抜剣して襲いかかってきた。皇女は左右の剣を十字に交差させて八須女の剣を受け止め、脚を上げて踵でその乳房を打った。

八須女は剣を取り落とし、両腕で胸乳を抱えて身を折り曲げ、膝を突き、横倒しに倒れた。

影皇女は、倒れた八須女には眼もくれず、その奥に座した息長皇后に向かって、剣を振り上げ、獣のように咆哮した。

「皇女！」

背後から叫んだ稚建皇子に、影皇女は振り下ろそうとした剣を押しとどめた。

「吾が言を忘れたか。汝は八須女を連れ、金村のもとへ行け！　誰もここには入れるな！」

影皇女は、肩で息をしながらじっと皇子を見つめていたが、不意に皇后の髪の毛を掴んで立たせ、壁に叩きつけた。皇后は壁に背を打ち付け、呻き声をあげてくずおれた。皇女は、床に転がって悶え苦しむ八須女を肩に担いで駆け出し、寝屋を飛び出した。

荒々しい足音が回廊に鳴り響き、やがて弱まって、消えた。
「皇后……」
稚建皇子は、壁にもたれかかってこちらを凝視する皇后に、静かに歩み寄った。